



01 | ダンサー・イン・ザ・ダーク 監督：ラース・フォン・トリアー 12/23、全国松竹系公開予定



02 | 花様年華 監督：ウオン・カーウアイ 2001年3月、Bunkamuraル・シネマ/銀座テアトルシネマにて公開予定



03 | 夏至(仮題) 監督：トラン・アン・ユン 2001年、Bunkamuraル・シネマにて公開予定

# 失われた女らしさと、その時代を求める、カンヌ発の映画たち

文/高野てるみ (映画プロデューサー)



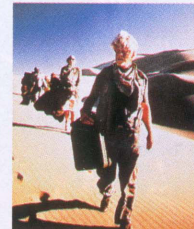
08 | ガールファイト 監督：カリン・クサマ 2001年春、全国松竹系公開予定



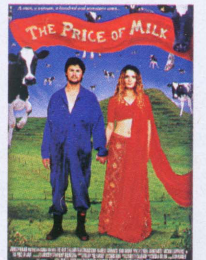
07 | ファストフード ファストウーマン 監督：アモス・コレック 2001年新春、シネマライズにて公開予定



06 | キング・イズ・アライヴ



監督：クリスチャン・レヴリング 2001年新春、シネマライズにて公開予定



05 | ミルクの値段(原題) 監督：ハリー・シンクレア 2001年公開予定

## 映画づくりの潮流はミニマム&リアル

カンヌ国際映画祭と言えば、すでに超有名な存在ではある。しかし、あの叶姉妹が、赤じゅうたんを踏んで会場入りした映画祭！というだけの認識では、チョット困ってしまう。世界中の富豪たちが、リゾートとして訪れ愛した場所だから、映画祭の中でも最もゴージャスで、当然なのである。が、作品選定についての信憑性も、世界一なのだ。その選択眼、審美眼は、他の追随を許さない。ユニークで鋭く、個性的でセンスが良く、何より先見の明がある。



PHOTO/Dominique Maurel

今世紀最後の、第53回カンヌ国際映画祭は、21世紀の時代の潮流を予言するような作品を選び抜き、世に送り出した。ここ数年来、ファッション界などと同様に、ミニマムで、リアルな表現の作品が主流だ。今回の最高賞、パルム・ドールを獲得したラース・フォン・トリアー監督の『自然体に帰ろう』という時代の流れに添ったやり方には、目を見張る思いだ。その『ダンサー・イン・ザ・ダーク』では、ビョークや、あのカトリヌ・ドヌーブが、社会の底辺に生きるしかない存在の主人公たちとして起用され、全編、化粧気ひとつない演出で演技している。上映後、映画の中の顔とは対照的に、カンヌの会場で、輝くビョークとあでやかなドヌーブが、赤じゅうたんの階段を降りていく。同じ階段を降りる私たちは圧倒されて声も出ない。

次に、主演男優賞に輝いたトニー・レオンが出演の『花様年華』にも、失われた女らしさを求めている。その信じさせる作品である。

この監督が描く女性には常に聖女である。悪女がカッコイイとされる今の時代に、男のみならず同性でさえ、イノセントで、自分を犠

牲にでき、無償の愛を捧げることのできる女性の出現を待ち望んでいる。そう信じさせる作品である。

次に、主演男優賞に輝いたトニー・レオンが出演の『花様年華』にも、失われた女らしさを求めている。その信じさせる作品である。

物は限られていて、色彩もモノクロ。本当にミニマムな表現で、そこが、リアリズムを感じさせ、カンヌの会場でもフランス人たちに大いに受けたのだが、中でもこの少女の存在が一番嘘っぽくないのだ。彼女もまた聖女である。だから、生き残っている。この事件、そしてこの作品の語り部なのだ。失われた良き時代さながら、良き女優の出現もあった。アメリカ映画、『ファストフード ファストウーマン』は、ニューヨークのダイナーを舞台とした日常の中の愛らしい小さな物語。アメリカ的に言えば、伝説的女優となっているジーナ・ローランズ、フランス的に言えばブリジット・バルドー型の主演女優アンナ・トムソンの顔を見ているだけで、映画がもつことから、彼女こそ、本物の女優といえる。最近どうして、あつという間に周囲には整形美女の女優ばかりが、横並びになったのか。彼女を見て、つくづく考えさせられた。そんな視点で観てみると、目からウロコの、女性が際立つ作品は他にもあつて、例えば、ある視点部門にノミネートされ、トリアー監督と同じくドクマ方式で作られた『キング・イズ・アライヴ』、監督週間部門にノミネートされ、サンダンス映画祭でグランプリに輝いた『ガールファイト』、人気のトラン・アン・ユン監督の『夏至(仮題)』、そして、コンペティション部門の選に惜しくも、マーケット部門でプレミア上映を果たした、ハリー・シンクレア監督の最新作『ミルクの値段(原題)』がおすす。ハリウッド映画とは一味以上も違う、これらの価値を知ったら、絶対にどっぶりハマルこと間違いなし！